
弟は狼少年

ねむこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弟は狼少年

【Nコード】

N3779N

【作者名】

ねむこ

【あらすじ】

弟ができた。それも高1の。母親の再婚でできた1つ下の弟は驚くくらいの美貌を持ち、ある日を境に日々わたしにちょっかいをかけてくるようになった。でもその正体は
不定期更新で
す

01 崩壊

うららかな春のある日。

わたしに高1の弟ができた。

母親が再婚してできた弟は、こっちが落ち込むほど
美しい。

すらつとした体つきに長い足。

明るい栗色の髪はツヤツヤのサーラサラで、ちょっぴり目尻が上
がったぱっちり二重の黒い瞳はキラキラしてた。

まだ成長途中なのか少し背が低かったけど、平凡なわたしとは違う
そのあまりに整いすぎた顔立ちに、これからの未来を想像して泣き
そうになったのを覚えてる。

あれから三ヶ月。

想像通りの未来にわたしはげっそりしていた。

高校からの帰り道に唐突に呼び止められるのなんて日常茶飯事。

「先輩！これ、弥生^{みよ}さんに渡してくださいね！絶対ですよ！」

可愛く脅しておいて、笑顔で走り去る年下らしき他校の女子高生を
見送る。

押し付けられた手の中のクッキーらしき包みを見て小さくため息が

出た。

左手の紙袋にはもう入りそうにない。

仕方なくコンビニの袋に放り込んで手首にかける。

もうすぐ夏休みだから今日は収穫が多いなー、そんなことを考えながら暑い日差しの中、ふと傷みやすいものがないことを願った。

誰もいない家に入ると手洗いとうがいをしてから冷蔵庫を開ける。

紙袋とコンビニの袋から食べ物らしきものを選んで突っ込み、ついでに出した麦茶をコップに注いでから麦茶を戻して冷蔵庫を閉めた。ごっくごっくと飲み干してぶはーっと一息つく。

コップを軽く濯いでテーブルの上に置くと、のろのろと二階に上がって自分の部屋を開ける。

むわっとした熱気に顔を顰めながら、机の横に鞆を置いてカーテンを閉めると高校の制服を脱ぐ。

制服はくしゃくしゃにならないようにハンガーにかけてから着替えを持って、またのろのろと洗面所に向かう。

シャワーで汗を洗い流し、雑に拭いてからパンツとTシャツだけ身につけてさっさとリビングに入ると扇風機をつけてTシャツの裾から風が入るようにちよっと持ち上げた。

あー、きばぢいー・・・

ほべべべと風を受けて5分くらいそうしてたと思う。

あ、と思い出して自分の部屋に上がって鞆を開けた。

これ、あなたの弟さんに渡してくれる？

クラスのアイドル的存在の彼女から受け取ったブツを見る。

食べ物だろうか？食べ物だった場合、この室温は危険だった。

コンコンと小さくノックしてからそつと扉を開く。

北側だからか、わたしの部屋のようにむわっとした熱気はあまりな

くてちよつと羨ましくなった。

「おじゃましーす・・・」

小さく呟きながら恐る恐る侵入する。

下の冷蔵庫はもう一杯だったがヤツの部屋にも小さな冷蔵庫がある。これが助かるにはそこに入れておくしか道は無いのだ。

決死の覚悟で綺麗に整頓された無機質な部屋の奥まで進む。

容量の小さな黒い冷蔵庫の前にしゃがみこみ、そつと冷蔵庫を開けた。

ん？なんだあれ。

手前にあるスポーツドリンクに隠れるように、薄めのお菓子の箱のようなものが1箱すみっこに入ってた。

少し覗き込んでチョコレートだと確信した。

なーんだ、じゃあこれもここに入れとけばいいや。

クラスメイトからのプレゼントをその箱の手前に置いて冷蔵庫を閉めた。

作戦の完了に、やり遂げた感一杯で一つ頷く。
立ち上がるうとして膝に手をかけたところで。

「見たのか？」

予想もしてなかった事態に肩が思いつきりびくついた。

黒い冷蔵庫の表面を見ればわたしの後ろにいる人影がぼんやりと映っている。

朝の話では今日は部活で遅くなるんじゃないのか。

驚きすぎてしゃがみこんだままの右肩に、そつと手が置かれた。

「見た、よな？」

そろそろヤツの手が肩から首をなぞり、首を半周するように手の平を添えてうなじを親指の腹が上下する。すぐぐったくて身を振ると、すぐ背後でヤツもしゃがんだようだった。

「もう限界なんだ・・・」

わかってよ、姉ちゃん。そう囁いてＴシャツの上から触れる手にわたしは激しく動揺していた。

02 嫉妬（前書き）

たぶんR15くらいだと思います。

02 嫉妬

懇切丁寧に襲われた。

必死の抵抗も華麗にスルー！。

あげく。

「人の部屋に黙って入っというてあんな格好してたのが悪い。」

などと非はわたしにあると言い出した。

実に嬉しそうな顔で。

あんな顔してるんだから選り取り見取りなはずなのに、どうしてわたし？

まさかシチュエーションに萌えてるだけとか。

あとは手近で済ませたと考えるのが妥当かと思っただが、やたらと優しかったのが気になる。

わたしが初めてだったから？

わずかな痛みと違和感の残るお腹をさすって、だるい体でベッドに入る。

食欲がなくて晩ご飯もあんまり食べられなかった。

はあ、とため息を吐いてから薄いタオルケットをお腹にかける。

目覚ましをセットして電気を消すと、ぼんやりと天井を見上げた。

眠れないと思ったけどＴシャツと短パン姿でごろごろしてたらいつの間にかうつうつとしてて・・・

ふと、何だか息苦しくて目を覚ますと暗闇のなか目の前にヤツのドアップがあった。

「・・・んむっ!？」

荒い吐息と口の中で蠢く舌の感触。
後頭部を押さえる大きな手の平。

だんだんはつきりしてきた意識でそれらを感じ取ると慌ててヤツの胸を押し返した。

いつからそうされていたのかわからない。

それでもヤツの興奮具合と溢れる唾液に、これは短くないなと瞬時に結論を出す。

何とか押し返そうとする両腕を片手で簡単に押さえ込まれ、それから急所を蹴ってやろうと足に力を入れる。

バレたのか見越していたのかヤツが片足で太腿を押さえてきた。
体勢がわずかに変わって、合わさる唇に隙間ができる。

追いかけるような仕草をした唇から固定された顔を背けた。

「ちよつと!」

大声で怯ませようとしたのに、荒い息のまま鼻が触れるくらいの距離でじつと見下ろしてくる。

その唇が、ふっと吐息のような笑みをもらしたようだった。

「いいの？父さんたちに見つかっても。」

なんだと？

わたしは、今、脅されて、いる・・・？

目を見開き硬直したわたしを見つめたままヤツが楽しそうに指を這わせ始めた。

眠い目をこすり学校へ向かう。

部活で先に家を出るアイツと登校時間が重なったことはこの三ヶ月一度もない。

ただ、これからはアイツの下校時間には気をつけるべきだろう。

そんなことを考えていて、よっぽど酷い顔をしていたのかもしれない。

教室に入るとクラスメイトの爽川君そうかわが話しかけてきた。

爽やかなイケメンという意味で爽川と呼ばれる草川君くさかわが。

「大丈夫か？気分悪いなら保健室に連れて行こうか？」

ちよつと覗き込むようにしながらそう言う爽川君はみんなが言うだけのことはあった。

「うっうん、大丈夫。ありがとう。」

なるべく明るく言うと、爽川君は少しだけ首を傾げる。

「本当か？もし悪くなったら言えよ、俺保健委員だからさ。」

頷いてみせると、じゃあ、と去って行く後ろ姿が確かに爽やかだった。

爽川は伊達ではなかったのだ。

家に帰っていつものように部屋で制服を脱ぐ。

スカートのホックを外して白い半袖シャツの裾を引き出した。

シャツのボタンを順番に外し、最後のボタンに指をかけたところだった。

足音もなかったのに突然大きな音をたてて部屋の扉が開いたのだ。普通びっくりする。

驚いて顔を上げると、怒ったような表情をした現在部活中のはずのアイツが仁王立ちしていた。

どうしてヤツがここにいいのかわからなくても、ヤツのファンクラブの情報網があてにならないことはわかった。

シャツの最後のボタンに指をかけたまま前を隠すようにして早く出て行けと視線で促す。

わたしは着替え中、見てわかんない？

そんな堂々と覗きをしてないで、ほら、早く！

無言で睨みつけると勝手にずかずか入ってきて力任せに脱ぎかけのシャツを剥ぎ取られた。

なんでー！？

そのままシャツをゴミのように投げ捨てて、呆然としているわたしを今度はヤツが睨みつけた。

「あの男、姉ちゃんの、何？」

「・・・あの、おとこ・・・？」

怒りに燃える瞳に獰猛な光が宿ってるような気がする。

「朝、教室で姉ちゃんに近づいてた男だよ。」

それはもしかして爽川君のこと？

特に男友達もいないし、今日話した男子は爽川君だけだったし・・・

「・・・彼は、わたしが気分悪いんじゃないかって、心配してくれただけの、ただの、クラスメイト・・・」

え、でもちよつと待って、アンタそれをどこで見てたの？

アンタのクラスは一階でわたしのクラスは二階、そのうえ別校舎だよ？

しかも教室の出入り口は窓とは反対側だし・・・まさか廊下？

いや、コイツが廊下にいたら周りはもつと煩かったはず・・・

え？どういうこと？

一歩後ずさつたら素早く左腕を掴まれた。

「何で、逃げるの？」

ぐいつと左腕を引っ張られて、足がよろけて転びそうになる。

転ぶ前に抱き寄せられて閉じ込めるように背中にヤツの腕が回った。同時にぎりぎり左腕にかかる痛みが増していく。

「・・・痛い。」

小さく抗議すると、やっと気づいたのか手の力が抜ける。

「じめん・・・」

そう言つてそつと解放された左腕はヤツの手の形にくつきりと赤くなつていた。

見た目通り学校では優秀な成績を修め運動神経も悪くないのに、怒つたらこんな加減もできないの？

半袖じゃ隠せないところに残る痣のため息が出た。

明日どうしようとそこを見つめていると、今度は添えるくらいの力で労わるように左腕に触れてくる。

その手がそこをゆっくりと撫で、痣を見つめてどこかうつとりしている姿は少しだけ可愛く見えた。

03 嗅覚（前書き）

たぶんR15くらいだと思います。

03 嗅覚

荒い吐息に混じって姉ちゃん、姉ちゃん、とうわ言のように繰り返しながら、しつこいくらいねちつく責められた。

帰ってきたばかりで今は汗臭いからやめると怒った言葉は当然スル―され、それどころかわざと嗅いで回って鼻を擦りつけては悦んでいた。

コイツに変な嫉妬をさせてはいけないと身に沁みてわかった出来事だった。

そして、わたしは学校を休むはめになった。

朝起きてわたしがうまく立てなかったのをヤツが見ていたのだ。

階下での、体調が悪いみたいとか心配そうな声が聞こえて、どの口がそんなことを白々しく言ってるのかと怒りが湧いた。

昨日のねちっこいのに加えてヤツに早朝から1回襲われたせいでこうなっているのに。

まあ、薄くなったとはいえ痣のこともあるから微妙なところだけど・

・
ベッドに寝転んだまま左腕を見てため息を吐いた。

そのとき、コンコンとノックの音がして少しだけ扉が開く。

「すぐ帰ってくるから・・・」

扉の隙間から少しだけ顔を覗かせ、心配げにこちらを窺っていたが

ふと逡巡するように視線を下げた。
時間にしてわずか一秒、いや一瞬。

すぐに廊下の左右を見回して部屋に入ってくると扉を閉めた。

数歩でベッドに近寄ってきて膝について覗き込み・・・

あ、やばい。これは、と思ったところで簡単に捕まってキスされた。
開けまいと思っただけでも軽く鼻を摘まれ、息苦しさの開いた隙間に
舌が捻じ込まれる。

またこれー！？

いつてきますのキスならもつと可愛くやりなさいよー！！

息も絶え絶えの中、最後に思いつき舐め上げて微笑むとヤツはや
つと登校して行った。

はらはらと散りゆく桜が綺麗だった。

「あの、これから姉さんって、呼んでいい？」

じつと見つめてくる黒い瞳に、気づけば囚われたように頷
いていた。

あの日の、まるで犬ころが慕うような素直な眼差しが可愛
かった・・・

ピンポン、と鳴ってぼやあつと目が覚めた。

あーあ、あの頃はヤツも可愛かったな・・・

そんなことを思いながら二階用のインターホンで応答する。

「・・・は、い・・・？」

扇風機をつけて寝てたからか、のどがいがいがして上手く喋れなかった。

『あ、悪い。寝てたか？俺草川だけどプリント持ってきたんだ。今大丈夫か？』

「うん。ちょっと待ってて・・・」

自分の格好を見下ろして短パンの上にスカートをはく。

Tシャツの下のブラを直しながら階段を下り、いがいがするのどにお茶を流し込んでから玄関へ向かった。

玄関のドアを開けるとスポーツバッグを肩からかけた草川改め爽川君が立っていた。

「わざわざごめんね？」

「あ、いや、俺も昨日のこと、ちょっと謝りたくて・・・」

昨日？

何か爽川君に謝られるようなことあったっけ？

「ほら、俺、昨日体調悪そうだったの気づいてたのに、あのとき保健室までちゃんと連れて行っとけば今日は休むこともなかったんじ

やないかと・・・」

爽川君は爽やかで優しかった。

これなら学校での人気ぶりも頷けるというものだ。

「あの、これは昨日のとは全然関係ないから気にしないで？」

根源は昨日のと繋がってるけど、そのことを爽川君に言っても仕方ないし。

それよりできれば忘れてほしかった。

「そか？なら・・・あ、これプリント。進路についての。」

バッグの外ポケットから出されたプリントを受け取り流し読む。

「うん、ありがとう。あ、ここまで遠かったんじゃない？ごめんね。」

爽川君の家は知らないけど、たしかこっちと反対だったと・・・以前爽川君のことを根掘り葉掘り調べてたクラスメイトがそう言っていたような気がする。

「いや、ついでの用事があったから遠回りじゃないよ。じゃ、また学校で。」

「うん、ほんとにありがとう。また学校で。」

爽やかに去って行く背中を見送り、玄関のドアと鍵を閉める。

プリントを持って部屋に戻るとプリントを机の上に置いてスカートを脱いでから再びベッドに寝転んだ。

ふとのが渴いて目が覚めた。

ぺったらぺったらと一階に下り、冷蔵庫から缶ジュースを取り出す。冷えた缶ジュースを飲み干して分別ゴミ箱に空き缶を捨てていると玄関の鍵を開ける音が聞こえた。

時計を見ればまだ4時前だった。

今日はやけに早い。

部活はどうした。

そう思つて廊下に顔だけ出して玄関を見る。

ドアを開けて入ってきたヤツは、靴も脱がずに顔を顰めてあたりを見回した。

「誰が来た・・・？」

玄関でくんと鼻を動かしたりあたりを見回してる姿は犬みたいだ。特に何もなかったし爽川君が来たことくらい言わなくてもいいですよ。

「別に誰も・・・」

「この匂い、近所の人じゃない・・・誰が来た？」

“誰が来た”から“誰が来た”になつて・・・

でも爽川君、そんなに残るほどの匂いとかしてなかったと思うんだけど。

「30分くらい前にそう・・・クラスメイトがプリントを届けに来てくれただけよ。」

爽川君と言いかけてやめた。

昨日を思い返せばろくなことがなかったから。

「姉ちゃんのクラス、この匂い……あいつか。」

えー！断定された！？

爽川君、断定されたよー！

まったく、アンタの嗅覚はどうなってるのよ？

呆れてため息を一つ吐き、玄関にヤツを残したまま自分の部屋に戻った。

04 確認（前書き）

たぶんR12くらいだと思います。

04 確認

ベッドにうつ伏せに寝転がって足をぶらぶらさせながら本を読んで
いると、ヤツがノックもせずに入ってきた。

ちらっと見ると、シャワーを浴びたらしくＴシャツとカーゴパンツ
姿で髪はまだ少し濡れているようだっただ。

そのまま真っ直ぐにベッドの横にある机の前まできて、机の上を眺
め回しはじめる。

でもすぐに、その視線がぴたりと止まった。

「・・・これか。」

他にも何枚があったのに、さっさと断定して一枚のプリントを持ち
上げると何の迷いもなく鼻を近づけて嗅ぎ始める。

まるで本物の犬のように。

ちよつとだけコイツの将来が心配になりつつ見上げていると、プリ
ントを鼻から離してヤツが真顔で振り向いた。

「覚えた。」

何を？

まさか・・・

それを聞く前に印刷物特有の匂いしかないはずのそれを机の上に
すつと戻し、見上げていたわたしの肩に押し掛かりながら首すじの
匂いを嗅ぎだした。

直に嗅ぐのに邪魔だったのか、指で髪を大まかに掻き分けてうなじ

を晒し、鼻を擦りつけるようにして匂いを嗅いでくる。

徐々に肩、背中と移動していき、そのまま爪先まで嗅ぐと今度は仰向けにされて喉から胸、お腹と嗅いでいく。

全身を嗅ぎ終わって満足したのか、重なるようにして体の上にとつてくると左肩に頭をのせてぎゅっと抱きついてきた。

「良かった。あいつの匂いがしなくて・・・」

何がしたいのか大体わかってたけど、やっぱりため息が出た。

爽川君とは玄関でほんの数分立ち話をしただけなのに、それで臭いがるならどれだけ爽川君が臭うのよ。

それっきり、じっとしているヤツの頭をぼんぼんと叩く。

気は済んだ？なら早くどいて。

アンタ結構重いよ？

すると、わずかに頭をずらしてヤツが下から見つめてきた。

はにかむような、あの頃の眼差しで。

「いい？」

可愛く見上げるわりには人の体に足を絡め、その左手はTシャツの下に潜って脇腹をさすっている。

くりつとした黒い瞳を見つめていて、ふと初めからこの目に弱かったことを思い出した。

この全身で慕ってくるような、子犬のような真っ黒な瞳に。

道路に面した窓を見れば、レースのカーテンはきちんと閉まってる。お向かいさんとは道を挟んで距離があるから大丈夫だとして、お隣さん側の窓は遮光カーテンも閉まってるし・・・

こんなことを確認した自分のため息が出た。

すぐそばにある真っ黒な瞳に視線を合わせると、仕方ないというように頷いた。

そのとたん、ふっさふっさと揺れた尻尾は幻だと思ったかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3779n/>

弟は狼少年

2010年12月11日16時40分発行